

<令和7年1月定例記者会見>

1 開催日時

令和7年1月9日（木）午前10時30分～午前11時30分

2 場所

滝沢市役所 庁議室

3 来庁した報道機関

岩手ケーブルテレビジョン、岩手日報社、読売新聞社、朝日新聞社

4 発表事項

冒頭、武田市長から新年の挨拶及び抱負について話があった。

(1)「第18回滝沢市郷土芸能まつり」の開催について（文化振興課）

1月26日（日）に「第18回滝沢市郷土芸能まつり」をビッググループ滝沢で開催します。このまつりでは、滝沢市の郷土芸能保存団体が集まり、それぞれが伝承する踊りを皆さまの前でご披露します。

今年のまつりのテーマは、「さんさ踊り」にスポットを当てた「さんさが集う滝沢市」となっています。

招待団体は「元村子どもさんさ愛好会」と盛岡市の「大宮さんさ踊り保存会」、また、滝沢市出身の民謡歌手「藤岡祐衣」さん、滝沢市立滝沢中学校2年「外久保穂」さんがゲストとして出演します。

そのほかにも神楽や駒踊り、田植踊りなど郷土芸能が盛りだくさんです。皆様のご来場をお待ちしています。

(2)「滝沢の近所でお仕事探しませんか？」の開催について（企業振興課）

滝沢市商工会青年部及び滝沢市商工会が主催し、市も共催という形で携わっている就職マッチングイベントが2月9日に滝沢ふるさと交流館で開催されます。

市内企業を中心とした25社ほどがブース出展予定ですので、自分に合う企業を見つけたり、気になっている企業の話の聞いたりできる機会になると思います。

対象は就職希望者で、一般・学生は問いません。事前申込は不要で、参加費も無料となっておりますので、お気軽にお越しいただければと思います。

事業の周知及び取材についてよろしくお願いいたします。

5 市発表案件について記者からの当日質問

記者：郷土芸能まつりについて、元村子どもさんさはどちらの団体ですか。

文化振興課長：滝沢の元村地区で活動している、子どもさんさの愛好会です。

記者：チラシに記載の招待団体は、出演団体とは何か違うのですか。

文化振興課長：郷土芸能保存団体が中心となって毎年やっており、そこに別な団体をお迎えしています。元村子どもさんさ愛好会も毎年来ていただいております。今年も招待という形で参加いただいております。

記者：チラシに記載の「もちまき」はどのタイミングになりますか。

文化振興課長：会がすべて終了した後になりますので、午後4時前後になるかと思えます。

記者：イベントがコロナで中止になったのはいつですか。

文化振興課長：令和元年度と令和2年度の2回中止になっています。

記者：お仕事探しませんかについて、これは毎年実施しているものですか。

経済産業部長：そうです。5回目になります。

記者：いつもこの時期に実施しているものですか。

経済産業部長：そうです。

記者：就職マッチングイベントというのは割とあると思いますが、このイベントならではの点は何かありますか。

経済産業部長：恐らく新卒の皆さんを対象にした就職マッチングイベントというのは多いかと思いますが、このイベントは年齢を問わず、市とその近郊の会社に来て、まさに近くで仕事を探すというものです。また、単純に就職という話ではなく、どういう会社があるかということも併せて知っていただくという目的もあります。

記者：昨年はどれくらいの方が来たのですか。

経済産業部長：昨年は、来場者127名、企業ブースなど複数訪れる方もいるので、延べ人数が277名です。一昨年は89名でしたので、徐々に来る人が増えています。

記者：先ほど毎年同じ時期とのことでしたが、HPを見ると昨年の開催日は3月3日でよろしかったですか。

経済産業部長：そうです。毎年1月～3月くらいの中で今までも開催しています。

記者：今年は就活の期間に合わせて前倒ししたというようなことではないですか。

経済産業部長：ないです。新卒の皆さんだけを対象にしたものではなく、まずは企業を知ってもらうという部分も含めていますので、就活期間への配慮まではしていません。

記者：対象者について、就職希望者（一般：学生問わず）とありますが、市民に限定しているわけではありませんか。

経済産業部長：限定していません。

6 その他記者からの当日質問

記者：今朝の日報に、市内では全中学校でプール指導を廃止するとありましたが、経緯や理由など改めて教えてください。また、特定の学校ではなく、市としてすべての学校で廃止に踏み切ったことについて市長のお考えを聞かせてください。

教育次長：これまでコロナ禍以降、生活様式に対する考え方の変化や、ジェンダー、熱中症など、様々な事情は滝沢市以外でも全国的に出てきていました。それを踏まえて市では、プールの在り方について以前から検討していました。稼働率などを考慮し集約化についても検討してきたところですが、市には規模の大きな学校もあり、移動しての授業というのは難しいとの考えに至りました。そもそもプールの授業は各校でやるかやらないか判断できるものですが、各校でバラバラに対応するよりも、9年間（小～中学校）という枠でしっかりと安全指導を考えたいので、小学校ではまず泳法を学び、中学校では安全指導をより強化していくという形で、全校統一のプログラムで対応していくことが望ましいと考え、検討組織も設けながら、今回の結論に至ったものです。

記者：小学校で廃止にしないのは、小学校で泳法を引き続きプールを使って学び、そのうえで中学校では水難指導など安全面の指導に全体としてシフトしていくということですね。

教育次長：そうです。小学校の早い段階でしっかりと泳法を教えて、早い段階で泳げるようになってもらえればと考えています。来年度からは外部のインストラクターなどにも入っていただきながら、よりしっかりと泳法を学べるようにして、中学校では実技は行いませんが、着衣水泳などについてはよりしっかりと指導していくことで考えています。

記者：インストラクターなど、民間委託する予定があるのですか。

教育次長：今年度に入ってから、民間のスイミングスクールの方などとお話をして、指導に来ていただく、また小規模校であれば移動も可能か検討したうえで、スイミングスクールに移動して指導いただくなど、現在どういった方法があるか、どういう時期だと受け入れていただけるかなど検討しています。また、市では大学生がラーニングサポーターとして授業の補助などに入っていましたので、そういった皆さんにも参加いただけないか検討中です。

市長：次長から説明があったとおり、中学校だけの水泳授業を考えるのではなく、9年間の期間でどういった教育をしていくか、どの時期にどういった学びをしていけば良いか、体系的に考えていく必要があると思っています。中学生になってくると、ジェンダーの話や身体の成長など、なかなかプールの授業に参加することを躊躇するという場面が多くなってきていると思っています。欠席する子どもたちが多いということは、心と身体の問題に対応しきれない部分があったと思います。それをどうやって補い、子どもたちの成長に合わせた教育をやっていく必要があると考えます。あわせて、気象状況の変化は大きな課題であり、天気が良くても熱中症対策などでプールに入れなかったり、稼働率がずいぶん低くなってきています。あわせて、市内の中学校では、プールの老朽化というのも課題でした。それらを改修しながら、また安全性の面から校舎も改修しながら、どう教育を充実させていくかということで、1つの決断になりました。昨日、全員協議会で議員の皆様にも説明をしました。これから、市内の各小中学校に対しても今後の市の水泳授業の在り方についてしっかりと説明をしながら、理解を得る場をつくっていかれたらと思っています。中学生になると、昔と同じようにはなかなか水泳の授業に参加してくれない状況があること、それぞれの要望に沿ったあり方を考えていかなければならない時期なのかなと思っています。こういった状況で水泳の評価をしていくというのもなかなか難しいことだと思います。9年間で、教育指導についてご父兄の皆様、地域の皆様などに説明をしていきたいと思っています。

記者：すでに在学中の皆さんと保護者の皆さんには、随時学校を通じて説明していくのでしょうか。

市長：そうです。水泳の水着を購入するかどうかもありますので、説明の場を設けて、早めに父兄の皆さんにもしっかりと説明をしていきます。

記者：中学校の施設の老朽化とありましたが、中学校のプールは順次取り壊していくのですか。

市長：現在すでに1か所の中学校のプールは稼働できない状態です。判断を迫られているタイミングです。昭和50、60年代に建設された小中学校は、施設自体がとても古くなってきています。今後の小中学校の大規模改修の中で、どこにどう注力していくか、広い視点で考えながら判断していきます。

記者：コロナ禍以降やジェンダーの話は滝沢市に限った話ではないかと思いますが、中学校でのプール廃止に至った、市としての一番の要因は何ですか。

教育次長：最大の要因は、すべての学校で同じ教育課程であるべきだということです。全国や市町村によっては学校ごとに授業が違うところも当然あるかと思いますが、校長先生たちとの話し合いなども行い、学校ごとに異なる教育課程にならないようにという決定になりました。

副市長：様々な要因があるなかで、総合的に考えた結論になります。

記者：統一したプログラムでとのことですが、他の市町村での事例などを参考にした判断なのでしょうか。もしくは滝沢市独自のものなのでしょうか。専門家の話なども参考にしながらの判断なのですか。

教育次長：体育授業の中で、水泳にするか武道などにするかは各学校の判断で決めるものです。今回の判断にあたっては、全国の事情なども参考にはしましたが、各市町村によって事情も違いますし、特にどこかの事例を参考にしたとか、学識経験者のお話を聞いたというよりは、市の校長会や検討委員会で議論して結論を導いたものです。

記者：市で進めている中心拠点について、開業時期が遅れると先日報道がありました。市の対応などについて聞かせてください。

市長：物価皇都や人件費の高騰の中で、事業者の方に入っていただける環境があるというのは、市としては恵まれているものと考えています。民間の事業者にやっていただいている開発ではありますが、市としてどういった形で後押しができるか、開発事業者とも協議しながらやっていきます。まずは安心して出店していただけるように、今後もしっかりと情報発信はしていきたいと考えています。これまで市ではどこが中心街なのかとよく言われてきましたが、この中心拠点の開発が進むことで市の賑わいの創造につながればよいなと思っています。A~Cの3つの工区がありますが、C工区には地元の事業者が入れるような環境も整えてまいりたいと思っています。市民の皆さんとどういった賑わいをつくっていくか、滝沢の未来の形として、しっかりと前に進めていきます。

副市長：毎月定例で会議を開催しており、その中で私たちも進捗状況を聞いています。その中で、当初描いていた時期よりは遅れておりますが、直近の議会でも7年度中の開業を目指してという表現で説明しております。当初は7年度の4月にオープンを目指しており、予定よりは遅れていますが、逐次状況については事業者の皆さんと話し合いながら、造成も8割完成しておりますし、随時工事に入れるように、市も一緒になって支援しながら進めていきます。

記者：遅れた理由というのは、材料費や人件費の高騰ですか。

副市長：コロナ禍であったことです。

記者：広さや内容などは当初の県などへの報告などから変わっていますか。

副市長：現在、地元の皆さんを含めて各工区にどういった配置をしていきたいか、事業者から随時リーシングをしています。最終的には変わっていくこともあるかと思いますが、現状では当初の内容で事業者がそれをもとに出店していただけたところを探して交渉しているものです。

記者：すべてのテナントが決まっているものではないのですか。

副市長：市としても企業さんの意向もあり、どのタイミングで発表できるのかというのもあり、開発事業者からも、概ねどういった業種かは聞いていますが、具体的な名前を聞いているわけではないので、随時出せるタイミングで皆様にお知らせしていきます。出店者側の発表の時期を見極めながら、オープンにしていきます。

記者：以前。スーパーや飲食店、温浴施設などと表記がありましたが、それに関して変更はありますか。

副市長：基本はその中で進んでいると聞いております。

記者：その中に地元企業が入るということですね。

副市長：キーテナントとして何が入るかによって、地元の業者さんも動向を見ながら判断していきたいと考えてらっしゃるようです。地元の企業さんに入っていただきたいということで開発事業者には話をしていて、場所としてはすでに用意してあります。

記者：市長の任期が11月で折り返した形と思いますが、この2年間でできたことなど、自己評価をお願いします。

市長：2年間の中で、自分が掲げてきた公約を盛り込んで第2次滝沢市総合計画を策定しました。その中で、リカレント教育に関する講座を5回開催することができました。また「こどもまんなか」にかかる部分では子ども医療費の所得制限を撤廃したことが一つの大きな形になったと思っています。そのほか、住民自治の深化を目指して、対話を重視するというのは1年目から継続してやってきました。医療の充実に関しましては、日赤という話を今までもしてまいりましたが、相手がある話ですので、ご理解をいただきながら、今後も地道に進めていければと思います。今進めている中心拠点にも、医療モールという形で医療機関の誘致に向けて今開発者が動いています。アンケート調査を今集計しているところですが、それを見ながら、今後の医療の方向性、充実について決めていければと思います。公約に掲げた内容は、第2次滝沢市総合計画に盛り込みながらやってきたわけですが、1つ1つ住民の皆さんにも説明しながらやってこれたというのは1つの成果だと思っています。そしてこれをいかに前に進めていくか、これまでの2年間は私の考えていることを市民の皆さんや事業者の皆さんに説明することができましたので、この後次のステップに向かう段階にこれだと思っています。この後の2年間で滝沢市が持っている魅力、そして新たな価値の創造とおう部分でさらに力強く前に進めるように頑張っていきます。この2年間の中では、目指してきたことはやってこれました。残りの2年間でしっかりと形に残せるように、あるいは今ではなく未来に向けた投資という部分を市民の皆さんにもお示ししながらやっていきたいと思っています。

記者：2025年に市としてしたいことはありますか。

市長：まずは総合計画をもとに市政を前進させること、また中心拠点の開発について事業がしっかりと進むように、後押しをしていけたらと思います。市の長を形作ること

が、これから私のやるべきことかなと思っています。今市内には2つの大学があります。短い4年間の中で若者にいかに学んでもらうか、素養を身に付けてもらうか、どういった経験をしてもらうか、若者活躍推進室、あるいはたきざわ魅力発信室の2つの室を軸にしながら、市内の若者たちとこれからの自分のふるさとであったり地域づくり、モノづくりなどいろんなことについて一緒に考えていける市にしていけたらと思っています。滝沢市だけが伸びるのではなく、盛岡広域で一緒になって盛り立てていけるように、市長として汗をかいていけたらなと思います。